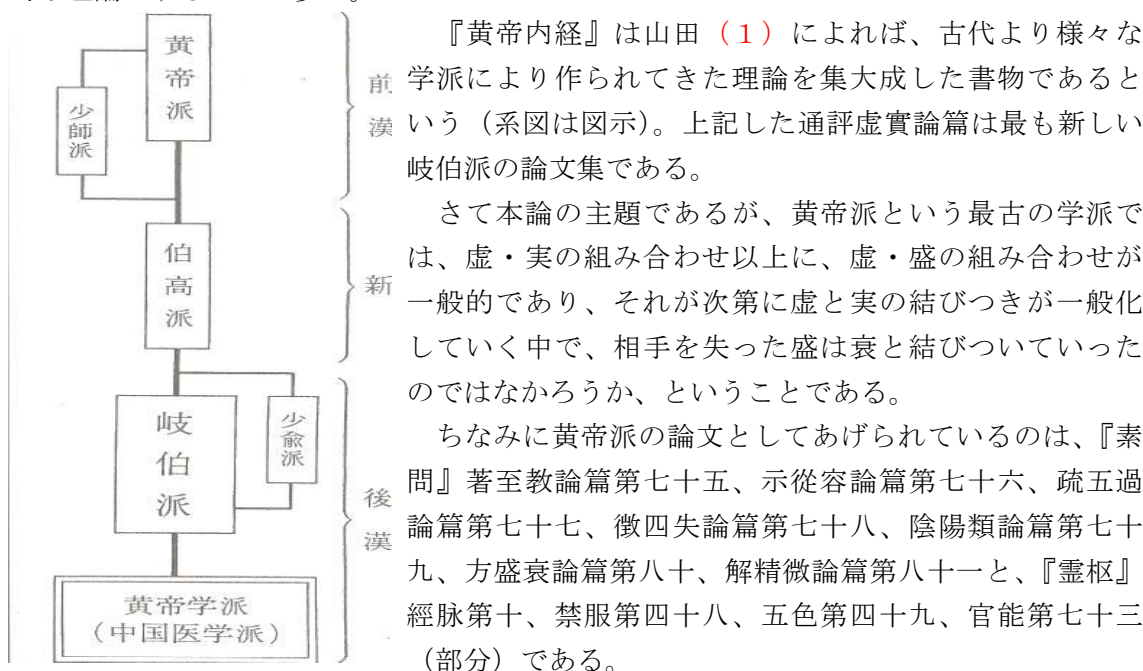


「虚・盛」から「虚・実」へ

中醫クリニック・コタカ 小高 修司

虚実の組み合わせは、その意味するところが中国医学と日本漢方の一部の方々の理論で異なるようである。中国医学では『素問』通評虚實論篇第二十八の「黄帝問うて曰く、何を虚實と謂うか。岐伯對えて曰く、邪氣盛んなるは則ち實、精氣奪するは則ち虚」を基本的な理論とすることが多い。



少師派は『靈枢』壽夭剛柔第六 (部分)、憂恚無言第六十九、通天第七十二、九宮八風第七十七、歳露論第七十九 (部分) である。

伯高派は『靈枢』壽夭剛柔第六 (部分)、骨度第十四、腸胃第三十一、平人絶穀第三十二、逆順第五十五、五味第五十六、衛氣失常第五十九、陰陽二十五人第六十四 (部分)、邪客第七十一 (部分)、衛氣行第七十六である。

少俞派は『靈枢』五變第四十六、論勇第五十、論痛第五十三、五味論第六十三である。

1. 虚・実・盛・衰の関わり

ここで各学派の盛・衰・虚・実の文字使用頻度を表記した。

	虚	實	盛	衰
黄帝派	84	22	53	2
少師派	24	7	6	2
伯高派	8	4	9	9
少兪派	6	0	1	2
岐伯派	396	197	296	118

(固有名詞は除く)

この表を見ていろいろ感じる点がある。

- 1, 黄帝派と伯高派は、「盛」が「実」より倍多い。
- 2, 岐伯派に「衰」が格段に多い。伯高派も「衰」の比率が高い。
- 3, 「虚+衰」と、「実+盛」の割合は、岐伯派を除く諸派はいずれも前者が多いが、岐伯派はほぼ同数。次いで伯高派、少師派の順で差が大きくなり、少兪派は実・盛が極端に少ない。

以下その詳細を各派毎に順に見ていく。

2, 黄帝派

黄帝派の論文を載せている『黄帝内経』の中で、『素問』の諸篇に「虚」の用例は多いが、他の字句は殆ど見られず、「虚實の要を取る」(方盛衰論篇第八十)が有るのみである。それに対し『靈枢』には種々見られる。經脉第十には、「黄帝曰く、經脉は能く死生を決する所以、百病を處し、虚實を調べ、通ぜざる可からず」に続き、「肺手太陰の脉」から各經脉の流注、是動・所生病の話へと続く箇所には「氣盛んにして有餘なるは、則ち肩背痛み、風寒汗出でて風に中り、小便數にして欠す。氣虚なれば、則ち肩背痛み寒え、氣少なく以て息するに足らず、溺色變じ、此に諸病と爲る。盛んなれば則ち之を寫し、虚なれば則ち之を補う。」と、盛が虚と対比して用いられており、両者の対比は以後も頻度高く用いられる。ところが本篇の最終段に入って「雷公曰く、何を以て經脉の絡脉と異なるを知るか」以後、「實なるは則ち…、虚なるは則ち…」という風に、盛は全く用いられず、虚と実の対比になる。

次の禁服第四十八には「其の虚實を調べれば、虚實乃ち止む」と有るが、これ以降の条文は全て盛と虚の対比になる。「病が手陽明に在り、盛なるは則ち熱爲り、虚なるは則ち寒爲り、緊なるは則ち痛痺爲り、代なるは則ち^{たちま}乍ち甚だしく乍ち間となる、盛なるは則ち之を寫し、虚なれば則ち之を補す」。同じ「大腸手陽明之脉」に関する記事は、經脉第十の上段に続く部分にも見られる。「氣有餘なれば、則ち當に脉が過ぎる所の者は熱く腫れ、虚なれば則ち寒慄して復さず、此れ諸病爲り、盛んなれば則ち之を寫し、虚なれば則ち之を補い、熱なれば則ち之を疾らせ、寒なれば則ち之を留む」であり、禁服篇と「盛なるは寫し、虚なれば補す」と共通の字句が見られ、一般的な「実を瀉す」と比較し興味深い。以後も盛と虚の対比は続く。

次の五色第四十九には「其の人迎脉が滑盛にして以て浮なる者は、其の病は日に進み外

に在る」「人迎（脉）が盛堅なる者は、寒に傷られ、氣口（脉）が盛堅なる者は、食に傷らるる」のように脈に関する「盛」の用例が見られるが、虚・衰との対比は見られない。

五色第四十九と官能第七十三には関連語句は見られない。

3、少師派

『靈枢』通天第七十二には黄帝派で取り上げた「盛なる者は之を寫し、虚なる者は之を補す」が2カ所に見られる。「陰を實し、而して陽を虚す」という字句が見られるが、これは前後の文意から判断すると、陰は陰血、陽は衛氣を指していると思われる。九宮八風第七十七には虚風、実風の用例が多く見られ、虚風は歳露論第七十九の後半にも見られる。

歳露論篇で興味深い用例は、黄帝の「其の卒然と暴かに死し、暴かに病む者有るは何ぞや」という問いに対し、「少師答えて曰く、三虚する者は、其の死 暴疾なり。三實を得る者は、邪 人を傷る能わざるなり」。さらに黄帝が其の三虚とは何かを聞くのに対し、「少師曰く、年の衰えるに乘じ、月の空しきに逢い、時の和を失い、因りて賊風の傷る所と爲るは、是を三虚と謂う。故に論じて三虚を知らざるは、工 反だ粗と爲す」。そして黄帝は三實について聞く。「少師曰く、年の盛んなるに逢い、月の満つるに遇い、時の和を得れば、賊風邪氣有り」と雖も、之を危うくする能わざるなり」。

この段を理解するには、この前の段の少師の答えを見る必要がある。

人と天地は相參ずるなり、日月と相應ずるなり。故に月満てば則ち海水は西に盛んとなり、人は血氣積もり、肌肉充ち、皮膚緻（密）となり、毛髮堅く、■理■（＝閉）じ、煙垢著れる。當に是の時には、賊風に遇うと雖も、其の入ること浅く深からず。其の月郭が空となるに至れば、則ち海水は東に盛んとなり、人は氣血虚し、其の衛氣は去り、形は獨居し、肌肉減じ、皮膚縱（＝緩）み、■理開き、毛髮殘（＝浅）く、■理薄く、煙垢落ちん。當に是の時、賊風に遇わば、則ち其の入ること深く、其の病めば卒暴す。

ここに見られる「実」の概念は驚くべき内容である。虚は賊風に傷られるという一般的概念の延長にあるのだが、一般の病邪が実しているときに用いられる、悪しき意味合いとしての実概念とは大いに異なっている。それは日本漢方の一部が言う「体力充実状態」に近い、賊風にも耐えられる充実ぶりを謂っているのである。

『黄帝内経』のなかで最も数多くの論文が残り、最後に登場したのは岐伯派であるが、その派の論文集のなかで、玉機眞藏論篇第十九に、この「三実三虚」と比較して以下のような興味深い条文がある。

黄帝曰く、余は虚實が以て死生を決すると聞いた。願わくは其の情を聞かん。岐伯曰く、五實は死し、五虚も死す。帝曰く、願わくは五實五虚を聞かん。岐伯曰く、脉盛ん、皮熱し、腹脹り、前後通ぜず、悶■する、此を五實と謂う。脉細く、皮寒え、氣少く、前後を泄利し、飲食入らざる、此を五虚と謂う。帝曰く、其の時に生有る者は、何ぞや。岐伯曰く、漿粥が胃に入り、泄注が止まれば、則ち虚なる者は活きん。身に汗し、後に利を得れば、則ち實なる者は活きん。此れが其の候なり。

三実から五実（つまり少師派から岐伯派）へと変化する過程で、実概念が変わったことが理解できるであろう。

このように黄帝派、少師派の段階では虚の相手は盛であった可能性が高く、実概念には

体力充実の意味が存していた。

4, 伯高派

『靈枢』壽夭剛柔第六には「氣に盛衰有り」の字句が見られるのを始めとして、「形充にして脉小以て弱なる者は、氣衰える。衰えれば則ち危うきか」のように「衰」の字の頻度が増えている。これは逆順第五十五に「脉に盛衰有り」や「脉の盛衰する者は、血氣の虚實有餘不足を候う所以」という用例や、これに続く刺法に関する論文のなかに「其形の盛んなる者」とか「其の已に衰えるを刺す」、また五味第五十六には「故に穀半日入らざれば則ち氣衰う。一いは日く則ち氣少たり」などの用例も見られる。

だが他の諸篇にはその傾向は見られず、平人絶穀第三十二には「胃滿つれば則ち腸は虚し、腸滿つれば則ち胃は虚す。更に虚し更に滿つれば、故に氣は上下を得て、五藏安定す」と「虚」字が見られる。

また邪客第七十一には「陽氣盛」という用例とともに、「其の虚實を調える」が見られる。また衛氣行第七十六にも「以て虚實を候い、而して之を刺す」などの虚・実の用例が少し見られる。

伯高派では盛衰の用語が見られ、盛の相手として衰が登場し、従来対を成していた虚には「滿」や「実」といった新たな対句が見られるようになっている。

5, 少兪派

『靈枢』論勇第五十には前半に「虚風」の用例が頻出する一方で、後半に「怒れば則ち氣盛んにして胸張る」「氣衰えれば下に復す」「氣衰えれば則ち悔る」の用例が一例ずつ見られ、盛と衰の対比が考えられる。

他の三篇には全く関連字句は見られない。

6, 岐伯派

他の諸派に見られず、岐伯派のみに見られる用語に「盛衰（または衰盛）」の熟語があり、全部で 31 箇所に見られる。また「虚実」という用語は黄帝派に 2 箇所、伯高派は 3 箇所見られるが、少師派、少兪派には無く、岐伯派では 25 箇所にある（いずれも篇名・固有名詞は除く）。

前にも挙げた伯高派の論文である逆順第五十五の「脉の盛衰する者は、血氣の虚實有餘不足を候う所以」から言えることは、盛衰は脈の強弱に用い、虚実は血氣の状態に用いるという使い分けが見られる。しかし岐伯派の『素問』離合眞邪論篇第二十七では「氣の盛衰、左右の傾移は、上を以て下を調え、…此れ皆 榮衛の傾移、虚實の生ずる所にして、邪氣の外従り經に入るには非ざるなり」では、明らかに盛衰・虚実共に人体の氣と関連づけられている。

また『素問』六節藏象論篇第九の「年の加うる所、氣の盛衰、虚實の起こる所を知らざれば、以て工と爲す可からず」で云う「氣が節氣を意味する」ことは、その前段から理解

できるが、虚実の用例は本篇中に他に見られないため、それが天気に関する事なのか、人体に関する事なのかは明らかにし得ない。

岐伯派の特徴的な用語として「下虚上実（または上実下虚）、下実上虚（または上虚下実）」が挙げられるが、『素問』の五藏生成篇第十、脉要精微論篇第十七、三部九候論篇第二十の四篇と、『靈枢』脉解篇第四十九に限ってみられる。

有名な『素問』通評虚實論篇第二十八の「黄帝問いて曰く、何を虚實と謂うか。岐伯對えて曰く、邪氣盛んなるは則ち實、精氣奪われるは則ち虚」では「盛」は既に主役としての地位を奪われている。

次に『靈枢』の諸篇を検証する。

九鍼十二原第一には「虚なれば則ち之を實す」「邪勝れば則ち之を虚す」の表現がある。

小鍼解第三には「氣の虚實を知る」の後に「氣盛んなれば補する可からざるなり。…氣虚寫する可からざるなり」「氣の逆順盛虚を知るなり」「虚なれば則ち之を實す」とあり、実と盛の混淆が見られる。

根結第五には「陰氣盛んにして陽氣衰う」と盛衰の語句を用いた後に、「急ぎ其の邪を寫し、其の虚實を調う。故に曰く、有餘なる者は之を寫し、足らざる者は之を補う」と虚実、補瀉の語が見られる。

官鍼第七にも「氣盛んにして熱する者を治するなり」「氣の盛衰、虚實の起こる所」と併記が見られる。

本神第八には「肝氣虚すれば則ち恐れ、實すれば則ち怒る」のような文が、脾・心・肺・腎と続き「必ず五藏の病形を審かにし、以て其の氣の虚實を知る」とまとめられる。

終始第九には「人迎一盛」「脉口二盛」のようにそれぞれの脈状が何倍（禁服篇ではほぼ同文の条文に、「盛」に代わって「倍」が用いられている）かによる病態が説かれている。脈状の盛んなことを謂う例は熱病第二十三、厥病第二十四、五禁第六十一、論疾診尺第七十四にも見られる。

脉度第十七には「盛んなる者は之を寫し、虚なる者は飲藥を以て之を補す」と盛虚の組み合わせが見られる。この用例は次に見られる「陽氣盛ん」「陰氣盛ん」からも、氣に関するものであることが解る。

營衛生會第十八には「夜半後は而して陰衰と爲す」「日西は而して陽衰う」「壯者の氣血盛ん」「老者の氣血衰う」のように天気と人氣の両方に盛衰の組み合わせが用いられている。

四時氣第十九には「盛んなるは之を寫し、虚なるは之を補す」の用語があるが、次いで「氣盛んなれば則ち厥逆す」と有ることから、この用例は人氣に関するものである。その後段に「以て胃氣逆を下さん。則ち少陽血絡を刺し、以て膽逆を閉じ、却って其の虚實を調え、以て其の邪を去らん」と虚実の用語も見られ、盛虚と虚実の用途の未確定といえよう。

寒熱病第二十一にも「方に病の時、其の脉盛ん。盛んなれば則ち之を寫し、虚なれば則ち之を補う」とあり、その後段には「陽氣盛んなれば則ち瞋目し、陰氣盛んなれば則ち瞑目す」と人体に関する記述が続く。

周痺第二十七には「必ず先ず其下の六經を切循し、其の虚實を視る」と脈に関する用例がある。

口問第二十八には「此れ陰氣盛んにして陽氣虚す」のような用例が多い。

決氣第三十には「氣の多少、腦髓の虚實、血脉の清濁は、何を以て之を知る」と、腦髓の働きの具合を伺うという他には無い用例が見られる。

脹論第三十五には「虚を寫し實を補えば、其の室より神去る。…虚を補い實を寫せば、其の室に神歸す」の言有り。

血絡論第三十九には「脉氣盛んにして血虚する者は…血氣俱に盛んにして陰氣多き者は」と、盛と虚の対比有り。

淫邪發夢第四十三には「陰氣盛んなれば、則ち夢に大水を涉りて恐懼し、陽氣盛んなれば、則ち夢に大火して燔し、陰陽俱に盛んなれば…」のように各種の氣が盛んな病態に関する説明が続く。この篇に虚に関する記述はない。

順氣一日分爲四時第四十四には「朝には則ち人氣始めて生じ、病氣衰う。…夕には則ち人氣始めて衰え、邪氣始めて生ず」と衰の使用のみが見られる。

背第五十一にも「氣盛則寫之。虚則補之」が見られる。

衛氣第五十二には「虚實の所在を候う者は」のように虚実の記述があり、後段には「下虚すれば則ち厥し、下盛んなれば則ち熱し、上虚なれば則ち眩し、上盛んなれば則ち熱痛す」のような虚盛の組み合わせが見られる。

天年第五十四には「其氣の盛衰」「血脉の盛満」「五十歳にして、肝氣始めて衰え、肝葉始めて薄く、膽汁始めて減り、目始めて明らかならず…七十歳にして、脾氣虚し、皮膚枯れる。八十歳にして、肺氣衰え、魄離れ、故言善く誤れり。九十歳にして、腎氣焦れ、四藏經脉空虚たり」のように盛に対応する字句として衰と虚が並列的に用いられている。

陰陽二十五人第六十四には「血氣盛」または「氣血盛」の語が頻出している。

百病始生第六十六には「藏傷れれば則ち病 陰に起きるなり。清濕虚を襲えば、則ち病下に起こり、風雨虚を襲えば、則ち病 上に起こる」のような用例を認める。

邪客第七十一には「皆 其の氣の虚實に因り、疾 徐に以て之を取る」のような氣に関わる虚実の用語と、「必ず先ず十二經脉の本末、皮膚の寒熱、脉の盛衰滑を明知すべし。其の脉が滑にして盛なる者は、病 日に進み、虚にして細の者は、久しく以て持す」という脈に関わる盛衰の用語が区別して用いられている。

官能第七十三には「虚を補い實を寫すを知る」「虚實を審かにす」のように虚実の用例が見られる。

刺節眞邪第七十五には「血脉偏虚し、虚なる者は足らず、實なる者は有餘」「必ず先ず其の經絡の實虚を察す」「虚なる者は之を補い、血にして實なる者は之を寫す」といった虚実の用例に続いて、「実風」「虚風」「虚邪の人に中るなり」といった用語が見られる。

大惑論第八十には「腸胃實にして心肺虚」と臟腑の虚実が述べられ、次いで「陽氣滿つれば、則ち陽盛んにして、陰に入るを得ず、則ち陰氣虚す、故に目 瞑ならず。…陰氣盛んなれば、則ち陰滿ち、陽に入るを得ず、則ち陽氣虚す、故に目 閉じるなり」と、盛と虚の対比が論じられ、まとめには「盛なる者は之を寫し、虚なる者は之を補す」の慣用句が記されている。つまりこの篇でも虚実と盛虚の両者の混淆が見られている。

癰疽第八十一には「虚に従り實を去る…實に従り虚を去る」という目新しい用語が見られる。

	黄帝派	黄帝派	少師派	伯高派	少兪派	岐伯派	岐伯派
	『素問』	『靈樞』	『靈樞』	『靈樞』	『靈樞』	『素問』	『靈樞』
虚のみ	76, 77			32,		3, 13, 15, 22, 23, 37, 39, 52, 55,	36, 78,
虚+實			77,	76,		10, 11, 21, 25, 44, 48, 54,	1, 4, 27, 30, 33, 35, 42, 66, 73,
虚+實+盛	80,	48,	72,	71,		18, 20, 28, 53,	2, 3, 8, 19, 21, 28, 52, 80,
虚+實+盛+衰		10,	79,	55,		1, 5, 9, 17, 19, 26, 27, 31, 34, 35, 36, 49, 61, 62, 63, 70,	5, 7, 9, 71, 75, 81
虚+衰						14,	68
虚+実+衰						29,	
虚+盛						47, 56,	17, 39, 51,
虚+盛+衰					50,	33, 40, 45, 66, 71, 74	54,

	黄帝派	黄帝派	少師派	伯高派	少兪派	岐伯派	岐伯派
	『素問』	『靈樞』	『靈樞』	『靈樞』	『靈樞』	『素問』	『靈樞』
實のみ						2,	
實+盛						30, 64,	23,
實+盛+衰							
實+衰							
衰のみ				56,			44, 70,
盛のみ	79,					8, 12, 16, 41, 43, 46, 58,	22, 24, 26, 43, 61, 64, 65, 74,
盛+衰		49,		6,		68, 69	12, 18,

表：各用語を使用する派別の篇番号一覧

【まとめ】

- 1, 黄帝派でも「衰」字は二篇で用いられているが、対比語としての用例はない。
- 2, 「盛衰」という対比用語が見られるのは、少師派の『靈樞』篇第七十九、伯高派の『靈樞』篇第六と第五十五、少兪派の『靈樞』第五十の僅か四編に過ぎない。岐伯派では格段に増加する。
- 3, 「虚盛（又は盛虚）」と「虚実」の対比語を同一篇内で用いているのは、黄帝派『素問』篇第八十、『靈樞』篇第十と第四十八、少師派は『靈樞』篇第七十二、伯高派は『靈樞』篇第七十一であるが、少兪派には認めない。岐伯派では格段に増加する。
- 4, 「盛衰」「虚実」の両対比語を含む篇は、少師派の『靈樞』第七十九、伯高派の『靈樞』第五十五であり、少兪派には認めない。岐伯派では格段に増加する。
- 5, 「盛衰」の対比用例でない「衰」は、単独使用は伯高派の『靈樞』篇第五十六、岐伯派『靈樞』第四十四と第七十の三篇であり、「衰・実」を同一篇に認めるのは全くない。また「衰・虚」は岐伯派『素問』第十四、『靈樞』六十八の二篇のみである。

- 6, 「虚」と対比しない「実」は単独使用が岐伯派『素問』第二の一篇のみ、「実・盛」が岐伯派『素問』第三十, 第六十四と『靈枢』二十三の三篇にのみ見られる。
- 7, 以上より当初予測したように、黄帝派という最古の学派では「虚・盛」の組み合わせが一般的であり、それが次第に「虚・実」の結びつきが一般化していく中で、相手を失った「盛」は少師派以降に「衰」と結びついていったといえる。
- 8, 黄帝派の段階では「虚」の相手は「盛」であり、「実」概念には体力充実の意味が存していた。
- 9, 伯高派の論文から言えることは、「盛衰」は脈の強弱に用い、「虚実」は血気の状態に用いるという使い分けが見られる。しかし岐伯派では、明らかに「盛衰」「虚実」共に人体の気と関連づけられている。
- 10, 岐伯派の特徴的な用語として「下虚上実（または上実下虚）、下実上虚（または上虚下実）」が挙げられるが、『素問』の五藏生成篇第十、脉要精微論篇第十七、三部九候論篇第二十の四篇と、『靈枢』脉解篇第四十九に限ってみられる。
- 11, 今回行ったような用語による篇の分類・分析を重ねることで、『黄帝内経』を構成する学派をより細かく分類することが可能かもしれない、とは夢である。

【文献】

- 1, 山田慶児：中国医学の起源 p.376、岩波書店、1999年

【謝辞】

論考に当たり東亜医学協会のHP上の小林健二氏作成のWeb版『素問』『靈枢』を使用した。茲に深甚の謝意を表す。